

2009/05/11-05:54

ボールを売りボールを寄付＝貧しい子にと英夫妻－南アW杯

サッカーの2010年ワールドカップ(W杯)が開催される南アフリカ共和国で、サッカーボールを売った収益を使い、貧しいアフリカの子供にボールを届ける活動を英国の夫妻が続けている。サッカーはアフリカの人気スポーツだが「満足なボールで遊べない子供は多い」と夫妻は訴える。

この夫妻は、ロンドン出身のジョン・ヘイコックさん(65)と妻のスーさん。W杯をにらんで南ア東部ダーバンで開催中の巨大観光展「インダバ」の会場の片隅で、約1800円～2600円で大小のボールを売っていた。1個につき約300円をアフリカの子供へのボール購入に回せるという。

ジョンさんは長く観光業界で働きアフリカが専門。04年のW杯南ア開催決定直後から販売を始め、これまで1万個を売った。南アのほかもザンビアやケニア、ウガンダなどでボールを配ってきた。大会開催までの1年間は特に盛り上がるため、一気に10万個を売ろうと張り切っている。(ダーバン＝南アフリカ共和国＝時事)

2009/05/13-14:31

マレー人街、存亡の危機＝奴隷の子孫が生んだ美観－南ア

【ケープタウン(南アフリカ共和国)13日時事】南アフリカ共和国の港町ケープタウンの中心部には、東南アジアに祖先を持つマレー人の街が存在する。パステルカラーの家々が並び観光地として名高いが、時代の変化で存亡の危機が叫ばれている。

かつてケープタウンを支配したオランダ人は、遊牧民が多く労働力として不安定だった黒人の代わりに、マレー人を奴隷として大量に連れてきた。19世紀の奴隷解放後、マレー人は集まって暮らすようになり、これが現在「ボカーブ(マレー人地区)」と呼ばれる一画となった。

家屋の壁を明るい色に塗るのは、奴隷解放の喜びを表現したのが始まりで、祝い事があれば塗り直すという。ケープタウンでもひととき目立つ、彩り鮮やかな街並みが形成されてきた。

しかし、アパルトヘイト(人種隔離)廃止後の南アでは、どこで暮らすのも自由だ。大家族のマレー人が郊外に広い家を求める例も増えた。一方で市中心部のボカーブは富裕層には魅力の不動産で、住人は次第に入れ代わりつつある。

ただ、観光業者には街の存亡は死活問題。政府の景観保護策は未整備のままだが、観光ガイドのデービッド・セトンさん(62)は「南ア人も最近景観の大切さに気づきつつある」と指摘。新居を建てる新住人が色彩にも配慮するようになる意識変革を期待している。(了)

2009/05/14-14:30

間に合うかW杯＝遅れるスタジアム建設－南ア

2010年6月開幕のサッカー・ワールドカップ(W杯)まで1年に迫った南アフリカ共和国では、スタジアムの建設が急ピッチで進められている。ケープタウンのグリーンポイント・スタジアムは3万人収容の旧競技場を解体し、倍以上の6万8000人が観戦できる新施設に生まれ変わるが、作業は遅れ気味。同スタジアム職員のミニ・マボナさん(29)は「大丈夫。来年2月までに周囲の整備も含めて工事は終わる」と強調した。

南ア経済も世界的な景気後退と無縁でなく、ズマ新政権も経済が最優先課題。ただ「南アは運がよい。W杯景気で経済の落ち込みはカバーされる」(同国当局者)と早くも楽観論が支配的だ。(ケープタウン＝南アフリカ共和国＝時事)

2009/05/16-06:44

野生のペンギン大人気＝民家に「侵入」も－南ア

熱帯のイメージが強いアフリカだが、南アフリカ共和国の南部、喜望峰で有名なケープ半島にはペンギンが暮らす浜辺があり、観光客の人気を集めている。アフリカペンギンの親子数十羽が集まるボルダースビーチは、誰でも浜辺に足を踏み入れペンギンに近づける。ペンギンも付近の民家に「侵入」するなど人間をあまり警戒せず、今や「ケープタウンに来る日本人観光客の9割は訪れる」(観光業者)という人気スポットだ。

ただ、20世紀初めに150万羽いたと推計されるアフリカペンギンは、海洋汚染などから10分の1に激減した。絶滅さえ危ぶまれる状態で、猫やカモメなど天敵から卵やヒナを守るため巣を保護する試みが行われている。(ケープタウン＝南アフリカ共和国＝時事)